きりつぼ

源氏物語 現代語譯

第一巻

甲[illegible][illegible]蔵述

特 12
4901
1

3

五十嵐力 著

昭和完譯 源氏物語 第一卷

五十嵐力博士源氏物語刊行會編纂

青柿堂藏版

青柿堂原稿用紙

①浮付 第一巻

1. 本扉 ― 別紙
2. 口絵 写真版アート 2T
3. 著者の ... 4p
4. 例言 ― 4p
5. 目次 ― 2p
6. 本文 ― 356p
7. 奥付 ― 1p

368p.

浮付 本扉 別紙 …附一

12
4901
目録

本扉ウラ

題字・装画　菊池契月

10和

14号

前附二

著者の言葉

五十嵐力

釋奠は儒教国民が孔子にさゝぐる最大の禮典である。我々は源氏物語に対して、釋奠以上の礼典を捧げたいと思う。

ダンテの神曲は広具足の聖詩（Poème encyclopédique）と称せられてゐる。我々は源氏物語に対して、神曲以上の意味で、豪美綜攝の聖小説と讃歎したいと思う。

源氏物語の作者は、明治四十年に、當時の

（一）

最高有識階級百数十名から、神武天皇、聖徳太子、弘法大師、源頼朝、豊臣秀吉、徳川家康の六人と相並んで、日本の生んだ最大偉人と称せられた偉大才一の婦人である。暫らく文化方面について云へば、その人心に与へたる感化す広さ、深さ、及び味ひに於いて彼女は並ぶ者は恐らくあるまい。

源氏物語は、我が国語国文の美さを高揚して日月と並べ懸けたものである。

源氏物語は人情活動の特徴さ、殊に日本国

民の精神活動の微妙な姿を、前古無比に描写したものである。

源氏物語は、一面外来の文化と対照しつゝ、日本の政治、道徳、宗教、風俗、芸術等の文化現象をば、要を掲げつゝ、精しく具体的に美しく、意味深く、面白く明示し若しくは暗示したものである。平安朝に関するあらゆる文化資料を失ふとも、源氏物語だけは失はまいと云つた史家の説の根拠はこゝにある。

源氏物語は小説を本領として、歌謡、抒情詩、叙事詩、劇詩等、あらゆる方面の風味を摂取し、活用し、添加したものである。その人情の曲折を詠み破った、優れた技倆は、此の物語の中に押入された約八百首の短歌が、その方面の風味に於て、人麿赤人より、業平、遍照、貫之、躬恒、俊成、西行、定家等に至るまでの何人も及ばぬのを見ても知られる。あらゆる古歌謡、古名句をば、皆その処を得させつゝ活用してゐるのを見ても知ら

れる。

　源氏物語は、平安朝の国民生活に現はれた美醜両面を取って、無遠慮に写実しつゝ、或は醜さを美化して、讃美の間に大きな疑問を投げ与へつゝ、時代に溺るゝ楽しみを十二分に示しつゝ、同時にこれを切り抜ける道をも考へさせたものである。作者自らが、あらゆる他の長所を取入れつゝ、これを消化して遥かに優れた新様を発揮したやうに、あらゆる時代の同胞よ、国家よ、此の呼吸で進め、新

らしくなれ、~~他には支配されず、他を支配して~~ 獨自に

、獨自に、何処までも偉くなれと、暗々裡に教へたやうな心持の到る処に充ちた作である。

かやうな作に対して、文芸に親しむ吾々は、唯だ神曲並に広具足の聖曲と讃美するだけでは足るまい、釋奠式に牛羊蔬菜を供ずるだけでは足りまい。もつと意味の深い、高い、広い、立派な礼讃の方法があらうではないか。

私の源氏物語は、全体としては、現代語訳、註釈、及び批評の三部から成立つものである。が、最初に先づ現代語訳の全部を公刊する。文章は原文の一字一句をも省かず、原意の一点一劃をも曲げずして、有りのまゝに全部を訳する。原文が簡古で現代人に理解され難い場合には、神通默会の加筆により、省略された含蓄を暗示して会得せしめる。引用挿入された成句については、その原典と助け合つた消息を兼ね享して、省略補備の呼吸を明らか

にする。八百首の挿入短歌るは、血脈の通っ
に要曲の説明を加へて、その道かるべき所に
置かれた理趣を明白にする。之致の錯綜、変
化、添加、省略の呼吸については、それが話
故に起因した現象かを明らかにする。是等い
づれも眼高手低の高上(たかあが)り至極ふ望みではある
が、四十年の汗で全生涯を、此の大作の読通
読味に抛った老学究の念頭は此処にあると思
っていただきたい。（昭和二十一年六月八日）
稿）

9ポ 40字×1?行

別ろく

五字下 例言

昭和完訳源氏物語は、故五十嵐力博士が畢世の事業として、その晩年に起稿せられた最後の著述で、而して遂に遺著となつたものである。

博士は、早稲田大学文科に於いて、明治四十二年以来、源氏物語の講義を擔當せられたが、大正九年、文学部に國文專攻科が新設せられてから、源氏物語の全講を思ひ立たれ、十数年の歳月を費して、源氏五十四帖全部を

桂 寺教子

源氏物語

教室に於いて講ぜられた。而して、昭和二十年、停年により大学を退かれるまで、約四十年の久しきに亘り源氏を講じ續けられ、源氏物語全巻にわたって、古今の諸註を取捨し、博士独自の見解から逐語的に綿密なる考證・註解・評釈の書き入れをした講本を完成されたのである。

昭和完訳源氏物語は、この長年月にわたる源氏物語の講義のエッセンスを、現代語訳として、博士独特の名文によって表現したもの

である。博士は、よほど以前から、この源氏物語の芸術的な現代語完訳を計画してをられたが、隠退を期として、万事を放下し、心静かにこの大事業に着手せられたのである。しかるに、その後空襲が激しくなり、危険を感じられたので、周囲のすゝめに随ひ、三月下旬に都下西多摩郡成木村に疎開せられ、山水うつくしき武蔵野の自然に親しみつゝ、村民の愛慕のうちに、落ちついて源氏の稿をついで居られるうち。四月十八日には、巣鴨の邸宅

甲島園は罹災し、また八月二十一日には、博士自身軽い脳溢血を起して卒倒された。その後腎臓病をも併発され、かねて心藏の持病もあり、博士の健康は楽観をゆるせぬ状態となつた。それにも拘らず、博士の精神力はいよ〱旺盛を加へ、夫人・侍医の周到なる看護のもとに源氏訳の日課は一日として廃することなく、原稿は積まれて山をなすに至つた。その頃から、生前に源氏を出版したき意向を洩らされたので博士門下の立正大学教授谷馨が

博士の絶大なる信頼のもとに委任をうけた、主となつてその実現に努力してゐるうちに、旧文芸春秋社の菊池寛氏、藤沢閑二氏、大同印刷会社の井関好雄氏等の協力を獲て、藤沢閑二氏を主事として五十嵐力博士訳源氏物語刊行會が設立され、早稲田大学内にある五十嵐力博士記念會もそれに合流し、伊藤康安・谷馨・岡一男を編纂委員に挙げ、蓍柿堂社長吉田正志氏に刊行業務を委囑したのであるが、終戦後の出版界は、豫定通りにすゝまぬ事情もあり、延びく

になつてゐる中に、博士の病状は日を逐うて悪化し、下半身の自由を失ふに至り、医師は遂に絶望を宣告したのであつたが、博士は毫も驚かれることなく、精神力のよく病魔を屈服し得ることを信じ、重態ながらも日課の執筆を怠らず、疲るれば臥床し、休めばまた机に向ひ、而も博士の謹厳なる、坪内逍遥博士の尊霊の前に紫式部と対決するつもりで、端坐合掌して執筆するを常として居られたのである。

かくて博士は、昭和二十二年の新春を迎へられたのであつたが、六月の八日、その日書かれた二枚の原稿を絶筆として十日の夜病革り、十一日の未明、安らかに大往生を遂げられたのであつた。

かく博士が後半生の心血を灑ぎつくされた現代語訳は、原文の二倍の分量となつたが、源氏物語の文芸的な精神・手法はもとより微旨・幽韻をも残るところなく博士独得の高雅な名文に移され、はじめて完全に現代人のも

のとなつたのである。

序でに昭和完訳源氏物語は、首書源氏物語の本文を底本とし、その誤脱をば青表紙系諸本をもつて厳密に校訂し、更にその疑点は河内本を参照したものであるから、現行流布の活字本の如何なる本文にも適応して、読者にまのあたり博士の名講義を聴く思ひあらしむることと思ふ。訳文の校訂については、明らかに不用意の誤脱と認めらるゝものを講本によつて考勘し、同じく不用意にもとづく形式上の不統一を正し、それ以外は、文章はもとより、用

字・假名遣・送假名、その他博士独自の符号の使用等すべて著者の意を尊重して原稿のまゝとし、編纂委員に於いて私意を加へることを避けた。なほ校正に際して菁柿堂出版部長平武二氏の細心なる助言をえた。

本書の出版が種々の客観的情勢のために意外に遅延したにも拘らず、こゝにその第一巻の上梓を見るに至つたのは、偏へに、前記、菊池寛氏・藤沢閑二氏・井関好雄氏等の協援助と、吉田正志氏の犠牲的出版の賜であつて

、ここに厚く感謝の意を表すると共に、本書全巻の完結を見るに至るまで尠らぬ御厚情を天下の博士の学徳を慕ふ人々と倶に冀ふ次第である。又本書の出版につき、直接間接に御指導御激励を蒙つた五十嵐力博士記念会長日高只一氏、芸術院會員菊池契月氏、本間久雄博士、河竹繁俊博士、池田亀鑑氏らに対しても厚く感謝の意を表する。

昭和二十三年二月十日

編纂委員謹識

目次

著者の言葉……一
例言……五
桐壺……一
帚木……四一
空蟬……一一九
夕顔……一三九
若紫……二一七
末摘花……三〇一

オモテケイ囲ミ

左右天地約二十五分

オモテケイ

昭和二十三年四月十五日　印刷

昭和二十三年四月二十日　発行

完訳　源氏物語　第一巻

定價　百二十円

著者　五十嵐　力（いからし　ちから）

発行者　東京都豊島区西巣鴨一ノ三三七七　吉田正知

印刷者　東京都　井関好彦

編纂者　五十嵐博士源氏物語刊行會

発行所　東京都豊島区西巣鴨一ノ三三七七　菁柿堂

大同印刷株式會社　印刷

8ポ

源氏物語　奥附（ハリ凹ミ）

菁柿堂原稿用紙　(10×20)

例言

昭和定訳源氏物語は、故五十嵐力博士が畢生の事業として、その晩年に訳行せられた最後の著述で、而して遂に遺著となつたものである。博士は早稲田大学文科において、明治四十二年以来、源氏物語の講義を担当せられたが、大正九年、文学部に国文専攻科が新設せられてから、~~[illegible]~~以来、源氏物語の全講を思ひ立たれ、十数年の歳月を費して、源氏五十四帖全部を教室において講了せられたが。

12.3—10000

だ有川。而して、昭和二十年、停年により大学を退かれるまで、約四十年の久しきに亘り源氏を講じ続けられたのである。

〔源氏物語全巻にわたって、古今の諸註を取捨し、博士独自の見解から逐語的に綿密なる考證・註釈（註解）・評釈の書き入れをした講本を完成され〕

昭和定訳源氏物語は、この長年月にわたる源氏物語の講義のエッセンスを現代語訳として、博士独特の名文によって表現したものである。

博士は、よほど以前から、この源氏物語〔物語の芸術的な現代語完〕訳を計画していられたが、隠退を期として、万事を放下し、心静かにこのために専念せられたのである。平小低、太平洋戦争の間にも、昭和十十年

南書院賞會原稿用紙
12.3—10000

十月廿九日のことであつた。しかるに、その後空襲が激しくなり、危険も感じられたので、園のすゝめに随ひ、三月下旬都下西多摩郡瑞穂村に疎開せられ、山水うつくしき武蔵野の自然に親しみつゝ、村民の愛護のうちに、落ちついて除村の稿をついで居られる中、四月十八日には、空襲に罹災の邸宅宇島園は罹災し、本月十五日には、早稲田大学文学部に於ける十年の業績成文庫も烏有に帰した。その文庫には博士の旅書全部が寄贈せられ、収蔵されてね

日頃大事

たのであつた。この打ちつづく繁務にも、博士はそれにも動ずる色なく、思いを前途にはせるが、そして、東亜医誌の執筆を続けられ、仕事もめき〳〵捗られていたのである。しかるに好事魔多しの譬へにもれず、また六月二十一日には博士自身強い脳溢血を起して卒倒された。兼ねてから心臓を病んでをられたところへの発作であるから、その経過は気づかはれたのであつたが、夫人の周到なる看護と、主治医の適切なる手当とによつて、大事に至らず、漸次快

しく、再び机に向はれるやうになつたが、その後かねて心臓の持病もあり、腎臓病をも併発され、博士の健康状態は楽観をゆるさぬ状態となつた。それにも拘らず、夫人、侍医の周到なる看護のもとに博士の精神力はいよいよ旺盛を加へ、原稿の日課は一日として廃することなく、原稿は積まれて山をなすまでになつた。その頃から、生前に博士門下の[illegible]が博士の委任をうけて絶大なる信頼のもとに遺稿の[illegible]となつて斡旋してゐるうち、文藝春秋の菊池寛氏、[illegible]閑二氏、大同印刷会社の井関好雄氏等の協力を獲て、藤沢閑二氏を主事として[illegible]服和宝澤保氏

物保刊行会が設立され、早稲田大学内五十嵐力博士記念会もこれに合流し、伊藤康安・八合散香・岡一男を編纂委員に挙げ、青林書院主人吉田正志氏に刊行業務を委嘱したのであるが、終戦後の出版界は、際定まりなく、すゝまぬ事情もあり、延び〱になつてゐる中に、博士の病状は日を逐うて悪化し、下半身の自由を失ふに至り、医師は遂に絶望を宣告したのであつたが、博士は毫も弱まれることなく、精神力のよく病魔を征服し得ることを信じ、泰然ながらも日課の執筆を怠らず、疲るれば臥床し、休めばまた机に向ひ、

に病あつを来るものごとくであつた。而

も博士の謹厳なる、無線の身をあらまがら、筆

て十分に病床に筆を執りしことあり。不自由

と判決するつもりで、新作を強めて机の前に端坐完掌

して執筆するを常として居られたのである。

かくて博士は、昭和二十二年の新春を迎へられた

源氏訳の筆を若菜の巻（上）ん進められたの

であつたが、正月の八日その日書かれた二枚の

原稿を絶筆として十日の夜病臥り、十一日未明、ん逝

去られたん往生を遂げられたのであつた。

~~原稿五千百帖の中三千四帖まで達し、約三分の二を訳了せられ~~

坪内逍遥博士の尊霊の前に

如月

かく博士が後半生の心血を灑ぎつくされた現代語譯は、原文の二倍の分量となつたが、源氏物語の文芸的本精神・手法はもとより微妙な趣をも残るところなく博士獨得の高雅な名文に移され、完全に近代人のものとなつたのである。

以上のやうな理由で「昭和完訳源氏物語」は桐壺から若菜上までで、未完のまゝ、終つたのである。しかし、博士が生前用ゐられた源氏物語の諸本には詳しい書入がしてあり、それが全部残されてあるので、未完の分は、その書入を本として追つて門下の手によつて流布せらるることになるであらう。

序でに

昭和完訳源氏物語は、首書源氏物語の本文を底本とし、その誤脱をば青表紙系諸本をも参照して出版の際に校訂し、更にその疑點は現行流布の活字本の何等かの内容を参照したものであるから、何等かの適応あることと思ふ。

して、讀者にまのあたり博士の名講義を聴く思ひあらしむ

南書院賞會原稿用紙

誤文の校訂については、明らかな不用意の誤脱と認められるもの（を浦本によって考勘した）以外は、原文字はもとより、用字、假名遣、送假名等すべて（その他博士独自の符号の使用）著者の意を尊重して原稿のままとし、（編纂委員）それについて私意を加えることを避けた。

なほ校正に際して青柳堂出版部長平武二氏の細心綿密なる助言をえた。

本書の出版が種々の客観的情勢のため意外に遅延したにも拘らず、ここに第一巻の上梓を見るに至ったのは、偏へに前記、菊池（と、吉田正志氏の）寛氏・荻澤開二氏・井関好雄氏等の併携助（犠牲的出版）の賜であって、ここに厚く感謝の意を表する

10
20
南富田宮森原稿用紙

天下の博士の學徳を慕ふ人々と倶に

と共に、本書全巻の完結を見るに至るまで変らぬ御厚情を謝す次第である。又本書の出版につき、直接間接に御指導御激励を賜つた五十嵐力博士記念會長日高只一氏、に對し深く感謝の意を表する。

藝術院會員菊池契月氏、本間久雄博士、河竹繁俊博士、殊に池田亀鑑氏ら

最後に、今は遺著となつたこの昭和完訳源氏物語第一巻の出版を、故著者五十嵐力博士の霊前に報告し、謹んで御冥福を祈り奉る。

昭和二十三年二月十一日

編纂委員謹識

12.3—10000

源氏物語原稿

◎桐つぼより末つむ花までの六冊

◎澪標より若菜まで上の計十二冊

但しわかなは二冊

以上計拾八冊

第一巻　桐壺

どの帝様の御代であったか、判明しないが、女御、
は、更衣などと申す、身分の高い侍い后妃たち
が澤山お傍にお附き申して居られる其の中に、
さして高い家柄の出ではないが、際立って御寵
愛を専らにする婦人があった。お気入りの柳
から、我れこそと高く止まって居られる后たち
は、心外な者の出現に驚いて、悪り嫉し、嫉みそ
ねみされる。それより位の劣る更衣たちなど

8

は面倒のことを気が気でない。朝な夕なに召さ
れては奉仕するにつけても、絶えず人を憚る風
きも気兼ねの絶えないのであらう、いつしか病身
になつて、引込みがちに重くなつた。自然心
細そうにして、祝宴は帰つて養生することが多
くなつて、帝は更に[illegible]と寡情と感じ
はされて、もう周囲の陰にかくれがちに遠慮がちな
す態度も無くならせられた。ただ色に出つて
の俤も別れに寄りそうな病変ぶらで
あつた。かうなると、公卿殿上人等、信高宮の

人達も困ったことだと、目をそむけたくて、お恐ろしい御寵愛ぶりだ。唐土でかうした事が原因となって、国も乱れ不祥な事件も起こつたものだと心配し合ふ、その中に今度は天下一統の不愉快な悩みの種子となって、楊貴妃のまがまがしい前例などが引き出されさうになるにつけて、更衣の身辺は八方不都合な事だらけになって来たが、唯だ至上さまの一人の純ないぢらしい御愛情を頼みとして、宮廷生活のうちに立ち交つてゐられたのであった。

東宮の父の大納言はとうに亡くなられたが、その北の方なる母君は昔気質のしつかり者で、両親うち揃つて今様に世間の思はくも汲みわかた、評判のよい宮家の后妃たちにも劣ることなく、何事の儀式にあたつてのけられたが、しかし此の人を頼もしく後見する者がないので、いざとなると大事の折には、やはりたよる所がなく心細さうに見えた。

中だ

帝と東宮との御仲は前世以来の深い因縁であつたのであらうか、この中に世に類ひのない、清らかな、玉のやうな男御子までがお生れになつた。主上はいつ連れて来るのかと早く見たいと待遠がりなされて、期日を早めて参内させて御覧になると、世にも珍らしい若様のお器量である。

第一の皇子は右大臣の娘である女御のお腹で、後見が強くて居られ、ゆかりしれぬ儲かみえ、これは疑ふ余地のない次世継として、みんながお仰ぎにお仕へ申してはゐるけれども、今度の皇子様のお美しさには

12)

しろは、とても似合ひになることが出来ないの
で、主上はただ一通り儀式一ぺんの御奏し方と遊ばす次第で今夜の
若君をば御自分だけの秘蔵つ子のやうに思召し
て限りなく大事にあそばすのであつた。
母君の更衣は本来が御側仕へきりの女官風の典侍公とされ
べき分際の人ではなかつた。が、主上のお寵愛振
りが従つて周囲の尊敬も並大抵でなく、
いかにも上流の貴人とは見えるけれども、主上
がむやみに馴れ親しませられる余りに、催物がある
るべき御遊びのあつた場合、折々、或は何か催物のあ

る場合々々には、第一に要求をお出しになる。のみならず待ってゐては御所に御して、その意のまゝお側近をお親しになるなど、お親しみの過ぎるところから、自然遠い方に見える婦人もあったが、此のお子がお生れになってからは、特別お気入りにお待遇遊ばしたので、それは悪くすると此のお子様が東宮御所に振りかわりにはいるかもしれないと、第一皇子の母女御さんは疑はれたのであった。その女御は他の后妃達よりも先に入内され、帝のお悼り様は

（14）

またこれも一通りでなく、それに此の様な事も有りになるので、帝も此の御寵愛だけはやはり自分に又気の毒に思はされるのであつた。かくて、更衣は帝の恐れ多い御寵愛に縋つてはゐるものの、悪様に言ひ瑕疵を探す人は多く、わが身はかよわく、病弱でありますし、いかにも心細い様子で、却つて帝の御寵愛の為に思ひ設けぬ心配を重ねることと嘆いてゐた。

猶ほ更衣の父はかつての大納言である。清

家柄で親のことも古い由緒相應であつた。

更衣は御召しによつて夜々出仕される毎に、数多の后妃達の局の前を通らねばならず、其の通る局々に人々がやきもきして姿を探られるのも並ならぬこと深刻である。出仕されるのにも、様々に気にかさなつて折れ曲り或は縁側から縁側に架け渡した打橋の上、或は内裏と内裏を繋ぐ渡廊下などのあちこちの通路に怪しからぬ悪戯をしくしては、送り迎へする女達の裾をよごして、堪らない目に会はせることもあつた。殊にひどいのは、時によると、家の真中を通り抜けて局達の前

後と先し喧め、出れと入れと相克して、ひどい目
に会はせることも度々であった。そして何か
事のある度んがうろうろ心配しに出掛けるが気数
に加はつてゐるので、すつかり思ひ疲れて若くに
新人で在るのと、若い敵に高相とも呼ばれ
なつて、清涼殿に陳情した新一つ、さすぐ売手る
る後涼殿にたらされた東宮の寄宿と外田に係し、
ならそれを上命として、小側に上つた女房の体良的に
場はつたのであつた。かういふ目に遭つた人
の恨みは当然のことと言ひやうのないものであ

つたのであろう。

この貞子が三年にならぬ七年に、高等女学校の

縁側があつたか、それならば第一高等の正された

のに当らず、高橋物産の菅原と採りすぐつて立

派に執行出来られた。それにつけても世間の

思ひ出からが卑ことなかしかし其のお子の立

派に大人びて入らつしやるお姿や妙な心持が、

二人ともお子さんが其の中にあるものかと思は

れつ信じらくれるのと見ては、嬉しさとし

て嬉しみながら、胸中のわかつた理解同情のあ

16

18

る人は、かうした人も人間世界に出現するもの
であつたのかと驚きの目を見張つたものであつ
た。
その年の夏のことである。[illegible]
んで、[illegible]と呼ばれるや[illegible]
した[illegible]
らうとされたが、どうしても[illegible]とはならない。
近年は劇の[illegible]になつてゐるので[illegible]
つかりの目[illegible]
この[illegible]

17

とはかう言つてゐないでにゐるたちが中、経素の中に、一ぱん
れに全く了つて、たつた五分の間に、兄ちがつてやうに
意識されたので、母君が優しく看病してお傍
をいたゞいたのであつた。かうした気の毒な
場合にも、お嬢様でらの様子を人に見られて、
ぬ、あるべからざる秘密を見すやうなすがあつて
生気失はれて、ゐることを忍ばずむきと言はれ、
こつそりと出かけられた。音は目およそくし涙ぐら
のあることなので、さうしはれ止めになることと
出来ず、ゐ見えられぬ。かなるあさと、言ひ

やうもなく情なく思はさうなる。もとは兎光澤
の私、太宰差し、かつての一世が、すつかり西やつれ
がして、心には行みくと深く押し寄へて居る中でも、言葉ん
出してしまふ中で失ぎ得ず生きて居るのか、それとも
れの分の道別へつかはれぬやうにされまつで消え入つ
たやうにして居るのところを出逢になると、
前にもう道をも未来も思はす緒結がなくいろ
くの中を法しく出結果あるばしたが、流石もう
中を中にはつ力もなく目つきまでもひど
くた傷さして、ぐつたりとして自分が他人かわ

21)

からぬやうな容子をして目をつぶつてゐるので、
どうなることかと途方に暮れてゐたにつ
ひ。さて満州の内と手車（てぐるま）に乗つて行く特別のお
許しは出たが、また東京の方へ出かけにな
つてはどうしても退出をお許しにならないので
あつた。

命（いのち）に定めのある生死（いきしに）の道にも、後れまい先
だつまいと約束をしてゐたではないか。
どんな事があつても わたしを見捨てては行くまいな。
と仰しやるのを、女も有がたい畏れ多いと存じ

あげして、
「かぎりとて別かるゝ道のかなしきにいか
まほしきは命なりけり
今生これを限りにお詫申す道に臨みまし
て行きたいのは生きる道ただ命生きたいのと
思ひます。
たならば」と息も絶えつゝ、途切れ／＼に言って、
申上げたさうな事が有りさうであるが、ひどく
苦しさうで又大儀さうなので、帝はまた此のま
ゝ成り行く果はと見ようと思召したが、要なか

23)

黒ぐろは常日から新気平癒の御花と一輪ゆずって
貰ふべき高値を請じて、それが花から始
めますので」と言って、大催促申上げるので、我ら
多く思召しながら道出をお許しになった。
うちの脇がいっぱいになり、然ればと言がって、とろらとおねだりする
ことが出来ず、この一花と明かれあわさせろか
たのれんの小姓の小僧は隙もなく行き帰りつつす
るが、それでしまだか〳〵と待遠しく思召して、
だかわかれ。何方も小僧言ってあぶしたが花まを
遅さた路になって到頭お縫切れになりました

と云つて、里の方々が騒いでゐるので、使
も殊ながら早く〳〵と帰つて来て、内報を申上げ
る。それを聞召した帝の御心の紛れはどんな
であつたであらうか。もう何が何やら分別も
失はせられて、唯だ引籠もりて入らつしやるの
であつた。御子様は如何やうすれば帰られるかと是非宮中に
始め御供して来た妓絶え見てゐたいと思召したけ
れども、服装の人がそのまゝ内裏に帰られるといふ
と云ふ先例が無いので、お下りになることにな
つた。御子には別に何事があつたとも思つてゐらぬ

宮子で、お附きの女房達が正體もなく泣いて居り、帝も始終泣きつづけてお顔をぬらして入らっしゃるのを、合点のゆかぬ宮子が見て居られるのを見て、壮年の帝が年寄と見える悄然の死別でも、親子の別れは悲しいのに、これは若ざかりの母君が後見もない稚子をおいて逝かれるので言ひやうのない哀れなものであつた。

定まつた日限があることなので、御のなく葬儀が執行されることになった。が、母の地の方が

自分も一しよにあの世に行きたい、と泣き／＼後を、葬儀を見送りする女房の車に乗つて、墓と家へと立派な葬儀の式場に準備としてみなまで着（？）別れた心地、あきらめんとあれであらう。

新婚の夫は、

シーン二

かなしげな顔でも、ちぎり／＼と見てゐると、やつぱりまだ生きていらつしやるやうに思はれるのがつらいから、いつそのこと、灰になられるのを見て、もう此の通り此の世には居ない人だとふつつり諦めてしまはうと思

ひやする。
など、とたもらしう言つてゐたが、歩ていよく車は東寺向うに着く
車から移び と、谿もさうに、まぎれが、紛乱し信さ
崩れてゐられるので、きつと此度からだらうと思つた
と言つて、みんなが拍て繕したのであつた。
さて雑任には内裏からの勅使が言つて三位の
位を追贈して女御に昇格させるとの宣命を読
みながたかえ、云ふ法の贈位は真に悲しいことで
あつた。それは生前に女御とだけでも呼ばれ
るやうにしてやることが出来なかつた体のは堪らなく心残りな情けないので、

せめては郵便になりたいといふ特別の思ひで
あつた。一種を追ひめない、この時代の人情
につい(わざと)ても嫉妬娼婦と交渉する人が多かつたが、
物の辞へ理解同情のあるのある人々は、さうの[illegible]の[illegible]が大層偉れてゐる
せんこと、心持が[illegible]で[illegible]少くのいやみもなく[illegible]るといふ[illegible]が[illegible]
[illegible](みどころの少しも無い人であり)[illegible]も[illegible]めずかつたことなどと、ごく
[illegible]つくんだになつて[illegible]だられのだま[illegible]
[illegible](見えた[illegible]やうな)[illegible]の[illegible]よりの[illegible]め
にこそ、つい[illegible]く[illegible]みもしたが、ほんとうに人
[illegible]の[illegible]しい[illegible]の[illegible]い[illegible]人であつたと、[illegible]上

づきの女房などまで語りあうてはなき人を偲んだのであつた。なくなつて始めて其の人が恋しくなることも世にあるのは、かうした折の事と語つたのであらう。

さびしい数日がなずん／＼と過ぎて行く。後の佛事なども立派に綺ふる内意向があつた。秋が深つたにつれて、たまらなく悲しく思召さるゝにつけて、后妃たちの上の局なども更に住せつけて、たゞ内殿に内侍なつづけて明めて暮らしてあらゆるのの僧を召て見上げます

30

人々までが神に話かく淋しい私であつた。「生前のみならず、死後までも人々に胸の塞がる思ひをさせる。けしからぬあの東京の小家暮ぶりではある」などと、仏衛隊などは云くするつて後まで、容赦なく陰口を利かれるのであつた。

弟は一の宮（いち宮）と小呪になつても、若宮と思ひ出しては悲しいしくとばかり思ひ出し、かれ、小家をめぐらされた女房の乳母（めのと）などと、お東宮の里方に進みしになつては若宮の小容子をおそれたるつた。その中に郵守が吹きはじめて、係に居の

31)

寒さを覚えて来た頃の夕暮がた、縁に凭くて
きくと思はず越まれ、鞠貝の東歸とした時
眺めの女房と云ふの見方にか表しお越され
た。それは夕月が梢風揺れたかる風情のきこえ紗行の所であ
つたか、事はそのまゝほんやりと深き物思ひに沈
沈み まはかまれた。東京席の杯には、かゝりよ
何とよく笑顔の中進るとを知しねばす
れたが、東京は都に縁のある東と愛してか並を
始め、また他人の個細に申上ぐる言葉などして、他
の人らが思つて、云ひ傳つたすのであつたか、そ

の容姿振舞などが、娘

須田先にちらついて、自身と親しむことがない

仰がれたさてそれが夢幻の影坊師で、生きた現身

の妻ではないと思ふのと、嬉しい陽に在る治された人に

は、やはり劣つてゐると認識された。

今婦はやがて東京の里郷に着いた。車が門の

内に入ると、もう空気のしめりが感ぜられたやう

れる。今までは寡婦暮しでいつぱいあつた

ども、娘一人の後見たる事と、家の体面に気を遣

く料理されて、見苦しからぬ態度で過ぎて来

33)

られたが、子らを亡くした悲歎に心が光を失つて泣き沈んでゐられる間に、心のすさぶにつれて、草までが高く伸び、しかもそれが野分に吹き荒らされて、れたやうに倒されて、月影ばかりが八重に絡んだ草葉（くさやぶ）も遮られずに射（さ）し入つてゐるのであつた。

母君はすぐには牛車を拝謁すると言ふこともできずにゐられた。今まで生き続つてゐるのがひどくつらいのに、このやうな恐れ多い使が草葉の露を分けてお入り下さるにつけても、お恥かしう

致します。
と言って、いかにも堪らなさそうに泣き沈みます。
ね。
余婦が
お伺いして見ますと、想像以上で、病的な程。
で、心も肝も尽きてしまいますやうでなりま
すると、業様が妻閉して入らっしゃ
るのを知つて、物の哀れから何とも知らぬ不忠者の心に
もいかさまと堪らなく思つたとでなれり
ませんよ。
とこうて、殊なく躊躇して、仰せ言とお伝へした。

ニミスゲ

主上様はかう仰しやるのでございますよ。
その後暫らく此の男が、生き甲斐のない花畫と、とぼとぼと過ごして来たが、何れ落ちついて来るたびに、また此の悲しい夢がめぐり来て、ひろ如もなく、めぐり逢ふことはないのは、どうしたものであらう。など云ふ事の名、ひとつ、せめて逢ふべき相手もないのだ、どうだ、一つ内裏までうちへ来て見たらいいか。それに若宮がぼんやりと草の中の家に過ぐして居られるので、気の毒に思はれるのでとはやく内裏へ入らっしゃいよな

どと、はつきりとしたお調子でお運びなさらずに、
泣きじやくりをしつゝ、あなた方、侍きの者
どもが勝手次第であらうと、お返
恩をおはなさないでいらつしやいにお宮子のお
痛は……さん、皆までは言はぬ中に、おぎと返事
してしまひました。それがお返事でお見
りあする。

二行アケ

と言つてお父を[illegible]した。
歎きくらして目も見えぬやうなか、父の亡骸
[illegible]言葉と共にして[illegible]ます。

二行アケ

と言つて辞兒まかる。

日数が経つたら少しは紛れることもあらうかと心待ちして居ると、月日のかはるにつれて、ますます恋慕が堪へ切れなくなるのは、どうしたものであらう。それに幼い人がどうして居るであらう、と思ひやるにつけて、一しよに育て上げぬのは気がかりでならないのだが、やはり故人の形見のつもりで若宮をつれて来てくれたらどうだ。

などと、お心こまやかにお書き遊ばして後に一

一首、

宮城野の露ふきむすぶ風の音に小萩がもと

を思ひこそやれ。

宮城野を吹きすさんで露を結ぶ秋風の音を聞かれ

野末の小さな萩の哀れな姿を思ひやるやうに、

わたしは宮中で秋風の音を聞いては、袖に露を

落しつゝ、遠方に若宮の上を偲んでゐるのだ。

とお書きになつてゐるが、最後まで拝見しきる

ことも出来なかつた。

悲しくなればこそ子に縁める、書き目にも

違ひました。と思ふと、魚の長いのがしみじみつらう思はれます。また千年経た松の木の枝が空に伸つて風を呼んでゐるのと見えます。と、寒く晴れ果てた花の枝の手前も飛ぶがしうから見えまするのに波も晴れ、渓谷に水が流れ出でいたすことでもあらう。高さ長くぬりまうめあります。最も多い仰嫁をなれ子つてはありますが、私はとても思ひ立ち出でまするかのことは出来さうもない。しかし若宮様は御神造となくいらつしやる御判官が深く御盛りになつてゐる

のでせうか、早く参内をしたいしくとおせおみおばすらおじうおえいますので、さすが古親子の御写から、御道理を据との御同情申されてあります、なども、この義母が御内にんでありますかを御案内ましせ。子と表して悲しい遊れた気もし、いさ御ありますから若宮様がこのまらない縁組でありますといふのは不意でもなく、勿体ないでありませうねえいますからね。

など言はれた。命婦は

41

若宮様はとうにお寝間でせうね。お
目は通りして、あしらくお宮子とも素聞した
いとはおやすみするか、さぞお待ちかねでございい
おめうしに、あんまり御無理なすって……
と言って帰りを急ぐ。母君は
亡くしたる子の悲しさに闇路を辿っている
心持をせめて其の片端なりとも言ふ
がいいよ、さうっぽくした気持になりたい
と思ひまする。ホホ、お約束の前でぐうっくと
お逃しなさいませ。此の年寄は

嬉しい熱田の御墨の御用の折にのみ
おともさしつかつたのに、かういふ悲しい
（ふたたび）お消息のお使としてお迎へいたすとは、こ
れも皆（存じ）気しなければうそと思ふと恐ろしく思ふに任
せ、御命（いのち）でお座いますよ。あの東宮は幼少
の時分から特別な志を持つてゐた人でお
座いましてね。それで父の大納言も臨終
の息を引き取るまで、唯だもう、この子の御
仲奉仕の為願などを申しても遂げさせてお
らげなさい。」わたしが強くなつたと言

43)

つて、がつかりして屈してはいけないと
んぷんなどと依存して力をつけて道切れました
たので、執拗した後援も持たねば非常交際
はなはだながの意外の結果を生むであろうと文学
じながら、ただこさ文人の遺言に習くないと
もつのばかりに、宮仕にさし立てたのでは
います。たが、身に係る
兼好の家と云ふことの純なさん、人
らしくもない私とか、まれながら、それと
陰れくーして、宮内組織の間につらい東

42

とつがはてゐるらしくみえましたが、その

嫉み妬みが積もり積もるにつけ胸を痛

めるやうな事が餘りと加はりますか、到

頭[illegible]臨終のかぎりなき病死のやうな様子で弱い

最期と見れのではないますからね。実に哀

れ多いことではありますが、主上様の

あの内親王をば、却つておつらう思ふのでゐない

ますよ。しかし其れも子ゆゑに[illegible]

つた親心の闇といふものでいいますか。

と、ときどき途切れ途切れに、咽せかへりつつ、言葉の中に、[illegible]

45

更はれ様子である。 宗師はつ、いけん。
主上様も同じやうな事を仰しやいまして
ね。 自分の心ながら、自分で割し切れずに、
も、人が見てびつくりする程、むやみにいと
しく感じたとしよのも、つまらぬ縁な役
かぬ契りであつたから(であらう)、今十年ほてわれ
るべき契りを勝手に結める為である
つひ(がうであらう)我をとてその為にそからして焼
悶燥燒して居るのだと思ふと、今になつて
は却つてつらい契りと結んだことだと悔

二

やすれつよの　わたしは今まで人の感情を害した事は一度もあるまいと思ふのだ、が、はたあの栗本中気には、思ふほども及ばぬ澤山の人の恨みを買うたよ。そして其の結果は、此の通り惨しく寡させん取り残されて、心を離らしづめることも出来ず世間様の悪さに心がまず、浮世にはなってしまふといふのも、前世のどんな因縁によるのか、分らかぬのかいと思ふだ、なくと、我慢もしく仰しやつて、山純の乾

くたびれちやつたわ。」

と、お稲はしい小宮子と奥さん物語って、除く

もう大分更けてしまひました。花の明け

お中に帰宅して寝室にいたしませう。」

と言って、急いで内室へ退いた。出かける時ふ

夕月が静かに山の端に入りかけて、前の空か

すうすうと傾いている。そこへ晩の風が

涼しく吹いて来た。草むらはいろいろな秋の虫が

鳴き人の涙を促しかけん鳴きしきる。として

立つに立たれぬ悲哀の家の気分である。

秋

鈴虫の鈴のかぎりをつくしてもなき
花あかずふる涙かな。
夜の草むらでは鈴虫が鈴振りを、松虫が振り
出して居る、そのめぐいある虫の一つと涙さへ
してとても泣き足らぬやうに涙が溢ります余
帰は果ぬ果ても尽きないのであつた。母君
か
いとゞしく虫の音しげき浅茅生に
露おきそふる雲の上人
さらぬだに虫が鳴き頻つて人の涙を誘つてる

49)

る草の茂みの中の小さい家に、あなたが訪ねて下さつて、
更に深の露と涙へて、住ねてゐさつたとしよ
のそれですから、下ちる怨を申上げてもよいわけ
ですねと言はれた。
源氏物語の風雅な物語的なもののあるべき場合
でもないのだ、唯さき人の研究として、らん
な用途も或はあらうかと、わざと取り繕つてお
かれた六条院一鈴にあそばせの古道具類らし
いものと添へられた。　蓑笠つけの女房達は、
女人の来事と思はれたがはこの
あまりにも衰の為にあるのは出来ないことでは

あゝ、またこれまで花形が宮中生活と親しく
馴れて来た習慣から、この家がひどく嫌しく、そ
れに主上様の山宮子なども、始終お偲び申上
げるので、一早く内親王ねがはしきなども、辞り
母君に勧められても、母君は「わたしのやうな
縁起のわるい年寄がお附添ひ申上げるとよ
りも外聞のわるいことであらう。しかし
一まづ乳母が手放して内親王からすんなりの
心も不安で堪らなく思はれる……などりよこと
で、観水様よくさつぱりした気内をさせ申さぬ

のであつた。
余はやがて帰つたが、まだ大阪の新聞が[illegible]
ぬのを、お嫁はしう見あげした。[illegible]なる中[illegible]
の拙世に、紙[illegible]が々を取り[illegible]ある
のと[illegible]なるから[illegible]て、家系の[illegible]ぬ
女帝だけ田舎人とお側にかけて、お[illegible]法とすれば
して入らうしやるのであつた。この[illegible]明[illegible]に
の晩にあるのは哀根歌の心緒で、これは[illegible]
[illegible]な絵師には書かれなすりへ[illegible]と何物[illegible]之
の二人に加[illegible]に去つていつたのであるが、以[illegible]

は本邦書家の和歌でも漢詩でも、唯だ古
根節に関した事に後水尾王の戀慕
に関した事を、かの離の詩篇に遊ばして入らっ
しゃるのである。奈帰の帰りを迎へて、優しく
向うの様子をお尋ね遊ばす。信かされて帰っ
た様子とこうもっと書簡する。母君からのお
返書と御焼にあるを、
お書を戴きました。貞の道さとこ
これはお見のりません。かうした作品を
挿めばにつけて、つい読み縦して心が無

53

二四二
晴れるのでもないます。

二四三
荒き風ふせぎし蔭の枯れしより
小萩がうへぞしづ心なき

風上に立つて荒い風を防いでくれてゐた大木にも譬ふべき母の衰へが亡くなりましてから孤独の萩にも似たる若宮様の心身の上が心配でならぬ、心の静まる隙もないのである。手紙の紀貫之がまた和歌を取り乱した心地といふのであるかと書くらすが、これも不幸揚句のまだあつかの揺れである

52

54

ぬ間の事ゆゑ、など、出ゆるし難なすことであらう。
帝はこの言ひ甲斐のない宮子と人に見られ
まいとあせつて我慢強くしたけれども、とても堪へ切れ
への那須のおもかげが出来なかつた。のみな
らず遙かに遡つて、始めて更衣を出立しにたつ
た其の年の月の事まで、取り集め限りなく思ひ出
醍醐を思ひ出しつゝ、更衣の浮世の折に風、ほんの一時逢はず
にゐても不安で堪らなかつたのに、あゝしてかこ
れほど逢はずにゐても月日は過ぐせるものであ
つたか。有り甲斐のない身の上ではあると思ひ

されたそうして

た、母君がどんな事を言つておいたのか。

二子たち

わたしも要求が彼の方の言の遺言と参照にもず、内の前線と手渡して伝へてくれた、御ごころうは、なつかしさのある身分に

〃せめて母御に物語りを、美しく思ひつづけて来たが、もう言うても甲斐のないことだが。

を仰しやつて、母君と先覚者のあはれにもなりやりねがしたか、

それにしても自然荘宮などが成人すれば、
廟を飾める序もあるであらう。恥つと
我慢して、もましして、機会を待つのがよい。
など仰しやつた。
それから宋師が持つて来た贈物を方呼にな
る。これが母親に名高い、臨邛の道士が楊貴
妃の在処を訪ねて、記憶に持つて来たといや
同じく、黒衣の霊が手傳した記憶の簪鈿であつ
たならばとあるへにするのも、甲斐のないこと
である。

(57)

歌 初句16字

二

たづね行く幻もがな傳てにても魂の在所をそこと知るべく

あの世に於ける更衣の在所まで尋ねて行つてくれる方士の魔術士が居てくれゝばよいが、あさましければ更衣の魂魄が何処に居るかはさまよふと知れるであらうに。~~ものであらう。~~

絵に書いた楊貴妃の姿は、えらい絵師の書いたのでも、筆の力に限りがあつて、生きた人の顔の足らぬ憾みがある。~~ものすみあり。~~ [illegible]太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉と詠つてあるい

58)

かの太液の芙蓉、未央宮の柳が楊貴妃の顔や眉に似通つてもゐたであらうが、しかし唐風の装ひは端麗ではあつたであらうが、婦人と惹きつける懐かしさのなよやかさの足らぬ嫌ひがある。そして其の懐かしさのゆたかさが男へつたへるものだといふことを思ひ出すにつけて、あいく変化の音容節の多様さ鳥の音にも譬へやうの無いものであつた。その変化を語り尽す朝ある夕べの日辞に、来世にも、天に在るならば翼を比べる鳥となり、地に在るならば枝を連ね

らむとならうと、玄宗楊貴妃と同様に、言の心[illegible]を遊ばしたのであつたが、余韻嫋々として現世の心残りの長くたつづけになる男女にめつたのは、限りなく恨めしいことであつた。

かくして帝は風の音、虫の音を聞かせらるるにつけても物思ひのみ思ほされるのに、弘徽殿の女御は、久しく清涼殿の上の御局に上りなく、此の頃は月が面白いとて夜の更くるまで管絃の御遊びに興じてゐられる。帝はそれを快からぬ御心持で耳障りと聞いてゐらつしやる

た殿上の近臣の女房などを交へて居る殿上人や女房たちは、御簾の際に居ならんで居た。この女房は押しあひながら、御簾の膝かけをかし、心のある人々で、殿上の歌などよめば、かつ[illegible]遊ばすにも知らず、かかる若き人の振舞と思はすのであらう。その中に月も入つてゐます。

二 雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらむ浅茅生の宿

月が入つて空が暗くなる、回廊に花やかなる女の

宮殿の雲上殿人と同じ流れに、寝待月、
恐って見える秋の月だ、
の一徳字、草やぶに囲まれた裏の家に、ほ、母が
妹、透み切った光を設ける。その前に母君が
めどうして俗人であることやら。」と、遠か
に母君や若宮たちのことを想像ねばしつゝ、燈火
ひの少くる張り照らしてゐらせられた。その中
にお近衛の役人が役者と愛する旅の風こえつの
は、もう酉の刻（午前六時）になるのであらう。
人の見る目と心を遠慮ねずして、役の内裁判
に内入りになるつたが、さて縁とうら嘘ともまはすこ

62)

とか生まれなかつた。（あゝ）更衣なせの折に
は、伊勢の御の歌に謳はれる「明くる
も知らでしゆつらうと寝たものを」と、思ひ起し
ばすはつてしや、やはり別の意味で男親の内辞卑はまま忘れ
にならうから。更衣の在た折には情
きさしん六條の家の新れ流されん、ごさ立ち宮さん
の旅を現きまぶるかのきれれ来る宮すまし、と
ん之あからずたゞ朝綱の間で、女房の仕で
民しあがる晩式の儀院に、嬉んのしるしばかり
第とつりきせられつゝだけで、書画を師上人の

御膳で聞召す宮向きの大納言子の御膳などはお
え向きも遊ばさぬので、御膳部に奉仕する者までが限り
女房の直々なる言子を拝して熱歎
するばかりで、なく、側近に奉仕する限りは男も
女も、うわは阿つぴらんでもなからうなどと言ひ合
はせ、ため息をついてうなづきあうた。しかしそれ
も然るべき前世の結構因縁か、あきらめるほかはないので
あらう。実家の生前には、狩多の人の識り
娘子をとも遠慮なく、あの実明な高様が、此の一
はするに限つて、道理心をとも失はせられ、

さう殺後にはまた此の通り、天が下の政を跡をまれ
山に切り離したわらの中くとうみ
は、ある時にはまた中のやんばれ重ねなどと、外國
の御まで引き出して、なれなれしくと驚き合ふので
あつた。
暫く経つて若宮が召された。一寸の間
は離き隔つて、と云ふ人間界の物とは思はれぬ
ばかりであつた。繊麗にした人だて来られたので、こ
れはえらい曲者と驚かれたられた。聖くる年め
君宮のお宮より〜に来る時にも絶え子をり絶し

て、是非此の若宮を御見てなければこそ、後見す

べき人もなく、あたら世間でも納得致しますまいこと

ので、却つて色々な事と申す思惑を抱いて、御躊躇に

も既に又せめておたのみ申すことになりましたので、世間

でし、あれ程御寵愛わたらせられたが、御寵愛

げに深い因縁があつたのだと申すが、此御殿の女は

も安堵の胸を撫でおろされたのであつた。ま

たかの若宮の御紹母君からの方は、日々に募つてまる

に、憶ゆることも多く思ふ故人で、せめて更衣の仏

る気もつかうとも存めて行かれない、行きたいと願

つてゐられた足の弱いのがつたのが、到頭弱くなられたので、常はお床の中で限りなく悲しみ給ひせられる。芸窓も今度はつとよそになられたので、わが家別れの悲しさを深く感じて涙ひおしきらなる。祖母又はまた筆まめしく、お別れを深み給ばしたのと、お見舞申して遊く御物のが悲しいくと淡々して亡くなられたものであつた。

かくして芸窓は内裏にのみばかり居られることとなり、宋家の御相ちはつた。その中に七弟になられたので、徳書振の御儀を御仕せられたが、世間の方でも、世間に

類の無い聡明ぶりを見せられたので、帝は怖いやうにまで思召されたのであつた。かくして帝は、今となつては后妃たちも誰れ一人、この子を憎むことが出来ないとお考へになり、「お母さんの亡くなつた後なりとも、せめて可愛がつてやつてください」と言つて、代の后妃達へは勿論、弘徽殿などへお出ましになる時にも、若宮をお伴れになつて、すぐに御簾の内へお入れになるのであつた。あらく粗暴しい武人やのみならず仇敵でも、この子を見ては微笑せずん。私

68)

[illegible]な容姿として知られるので、さすがの御寵愛も疎遠なままでゐしところさることが出来なかった。此の女御の御腹には皇女がお二人まで知られるけれども、若宮とはとうとう比べることが出来ないのであった。弘徽殿以外の后妃達も隠れずに遠ざけられ憂されたが、従って七草の方から、ますますむつかしい羨妬の妻撫子とか批判されるので、ますますひどくこの参いが掛けの生涯な数奇な男性が、噂がたってゐたのだった。かくして若宮は特に筆者なれる

69)

文学などは言ふに及ばず、ほんの慰みに習ひたさう
な音楽の中でも、琴や笛を奏しては実の如くすぐ
れた技能に宮中を驚かすほどやうなわけで、
わらは等を始へ言つてしまへば、信り申し却つて噂らし
く関之やうな事が常にあつた。
その頃帝等大事なりつつあるこまごまと高貴人の中に、
すぐれた人物があつた。帝はこれを周公さ
れて、若宮の将来を早くから御周人と宮中に召しかかへられ、帝は己に常多
の帝王の御遺誡があるからと他意あるを思はずして抱え
られ。しかし此の若宮を外戚後援的の鴻臚館に

お怒り遊ばされた。内大臣様と相談して辞任して

居る右大臣が、自分の子供の縁事でお暇を申しながらも

ありました。相人は晩婚して辞意も小首を傾けた。

来ませた。相人存

十七 二子

これは如何にも偉いお相で仰らいます。一方国

の親となつて、帝王の位に登るべき相

を具へたお方でありますが、そちらの方で

見ると、国が乱れ負憂があると戦争がないと

も限りません。けれども一方では朝廷の重臣と

なつて天子を補佐するといふ国相あり

一二にあつて、その方を見れば相識がありかり
違つて、上々吉にはなりません。
と言ふのであつた。なかなか辯も達者に優れた博
士であつたので、此の相人と交際した結果は、な
かなか意味の深いものであつた。やがて詩な
どと作り合つて、相人は今日明日にも帰国しよ
うとする間際に、帰化した縁故の者に
お目に懸かつたのは嬉しいと云ふ心持が、かへつ
いよお方にお目に懸かる早々、お別れして
帰国するのかと思ふのと、今日に懸かつたのが、却

つて出しみ節の経ずしてすまする、などいよ
曲折に富んだ心持へと、面白く作つて演出すると、わるくすれば
浅かかる情味と見せた詩句などと作りになる。
それをば限らぬ観客して、演ずる蹲踞上着と
捧げした。それに対して新しかじと怒れの下
されぬかあつた。此の事が自然場に上つて、別注
上から論うしになるわけではないが、書き
の祖父君たち傍などは、どんな素振であつたの
かと、気をまはされたのであつた。
これは高峯の相人観相の物語であるか、され

よう先き、彦も己に、哀れ多き身ながら、自分の内心
に日本流（ひのもとりう）の戦争（せんさう）を作りつけて、内訌（とくと）表の結末、
茶宗の将軍につぎ
黒高家の相人の様に思召されてあつたので、そ
までは他の者ならば親王（みこ）にもなまになかれためで
あつたが、相人の言ふところなれ至極、わが身よ
約にそつくらだと思召されもなされて、へられ
はなまなか、恥かくした術の修業も満足得られも
おちぬまんの親王などにして、露き世の波にも
まれるやうな目には会はせまい。それに自分
の於信もいつすで続くやら、わからないのだ。

これはやはり人臣になつて帝王の補佐とするような方が、行末安全なる事であらうと、内々考へ定め遊ばして、いよいよ儒学の学問を修得のさせなすつたのであつた。比類を絶した才質ぶりをみても、人臣にしておくのは惜しいけれども、親王となられては世間の疑惑を招くやうな生れついていられるので、それに高麗人の勧めが陰陽道の名人に内勘へなさつた所が、やはり同様に申すので、到頭源姓を賜はつて人臣に列せしめらるることとなつた。

75)

幾月も経つても御息所の事を忘れずにゐる

わからない。藁を縋るようなものと、思ふべ

き人々と話し入れて心晩になつたが話るが似

てゐるとよい侍女の人達へ話り続いた世の中で

あると追はれて近づくことをおそれやうに

ならやうれなかつた。先帝の御女で宮所

の方居ずられなかつたが、あつしたので。その母

る御方が大事に世話してゐられたが、主上の

侍りづきの典侍なる方が先帝御代の女官で、その母

后の方々にも親しく仕えてゐたので、それ

96)

の母の宮のお幼みの時から、よく存じて居ります、今も
時折お目にかゝる機会があるので、申上げたのに
は、

二

おそくなりましたお兄様の御婚儀に偏通
つたお方とかいふのを、わたくしもお見て
お三代にお仕へ申して居りますが、つい
まだお見知り申しあげたことがありません
せんが、その御方の姫宮様と申すのが、ひど
くお綺麗でお美しい方だと存じますと、お申し上げます
絵をつくりにお明りおぼすのは驚いて

あらまする。まあ、めつたに無い出来事よ
—で入らつしやりますよ。
と申し上げた。帝は本当か知らん、とお独り言に
やがて、入内の御申込があつた。
それを聞かれて、母后が驚かれたのか、母后である。

七の二

まあ悔しいこと！ 東宮の母女御がひどく言ひの
悪いで、桐壺の更衣が申し君めぬかかた時の
例も、つい近頃の事ではないか。まあ気味
がわるい。
と躊躇して、言つて、さつぱりと入内の御決心とつけか

ねてゐられる中に、その母后も亦お隠れになつた。取り残された四の宮が心細さうにしていらつしやるのを、主上から、「何、わたしの女の子たちと同様に可愛がつて上げよう」と、重ねて懇ろにお勧めなされた。そこへ、かつ例の女房達や、古い後見の親内様の人々や、殊に御兄君の兵部卿宮様なども、こんな風に心細く暮して居られるよりは、内裏住をなすつた方が嬉しさも紛れるであらうなど勧められるやうになつて、宮中へ入内されることになつた。藤壺の女御

79)

と非常に明るかつたので、藤壺の宮と呼び奉ることとなつた。いかさまにも容姿端麗な振舞が宮の御微と思はれるばかり似て居られる。そつくりと思ふ程似て居られるが、今度の藤壺の宮様は身分が立ち優つて、人々の心向けも申分なく、他の人達も選れつ一人来れば軽く貶ることが出来ないので、お前にお振舞ひ遊ばすことが出来た。不如意といふ事がなかつた。あの更衣は身分が高からず人も許さぬところへ寵の愛が生増であつた。それぐの運命であつたのであらう。

帝は更衣を喪った悲しみをお忘れになったわけではないが、御心がいつしか新しい人に移って、その交情に御心の慰めをお感じになるやうになったのも、人情の自然であろう。

かくして源氏の君は帝のお側をお離れにならないので、帝のお成りになる女君たちとも自然に親しくおなりになる。まして帝の寵をお得ねばならぬ后妃たちは皆ぢ隠れ通すわけには行かなかった。后妃といっても、帝の寵をあつめる人達である。自分が人に劣っていないと思っている人

あるいは〔らう伝が来たのか〕のか。名々〔とり〕に優れた作者を
では、あらゆれども、いづれも筆を執つて居られ
自分るのに、此の新しい言葉は大衆芸術らしく、一方
らしくそうして若さの孤独な躍らしによ
うとはされるが、自然に内目に姿まれる挨拶があ
つた。母君の内息的に別れ去つたのはまだかつと
三年のおで、その殆部は少し記憶に残つてみ
ないのであるが、「あの若い女の様そつくりで入
らつしやいましたよ」と乳母が申されるので
わかから、若さの一途心に、「あゝ懐かしい」と思ひ

はじめられて、婚約が側に行きたいと近づいて馴れ親しみたいと思はれるのであった。寺へ上も係長の目田様喬寛君らの仲間同志でよく葵薫の方に言はれました。

十三

「あの子と踊んしては下さるなよ。あなたは端めあの子の母の実家と係二つと言ふない縁組で入らっしゃるからぬい。どうかあの子の消さ陰子のと手純を思はずんぶ可愛がってやって下さい。姉の実家の親つき目つきなどは、あの子によく似て

~~木津海軍航海~~

ありますから、君とあの子と母子ゆかしく本当に
似合はしくないことは無いのですからね
い。
あれほどに仰しやるので、保子の君は御得心に
なりましたが、しかし紀や保子につけては隠れ宣言の心
とりはさうとつとめてそれが好結果になれの末まで女御は隠れ思
ひと方ならぬので弘徽殿の女御が
常にも感情を害することがあつた。弘徽殿の
女御が此の宮ともお仲らひの円満を缺いてゐたと
ころから、保子に對する東宮なせ時代の憎しみ

が再び芽を吹き出して、周ぎはうの邪魔物と思はれつゝやうになつたのである。かくして高麗の家は、京下に勢ある若き蔵人と良人、覚えられ、せられ、いよいよ高く言ふ若人は従ふなが、保良の家族の気がちろ容纔は此の女の家の上にあらぬばかり頃はしくみしらいのとめでて、世らではいつとなく高麗見と呼び、あらうことぞいとなつた。之わと言ふ英人で、高麗の家が美しい光常の内容に偉らがすかつたので、かがやく日の家と呼ばれた。

年の中は保良が十二歳まで呼ばれ。高麗はかろま

で、幼兒の其の意識と意へることと、
心意く思はれたが、其の中に元服させ
られることとなつた。到頭十二歳にて
それから程經つて、其の年一月に本心ばは
まれて、定めのある所へ、當座も／＼と急ぎ足
の務めを結ばれた。其の結果、いつかや學業
職に就いた東宮の元服、それは深窓
ねで執り行はせられた尊ばらしい評判のもので
あつたが、それからの一も其のやうんとりよ
内容があり、所々の役所で晴れの内容での品

86)

ちやう、また高御座や殿舎院の役人等が標式通りに準備する物だけは既に略出来てゐるが、特別の内容があつて、美々しく集つてし華やしたのであつた。　さて内儀の行はれたのは紫宸殿の内で行はる清涼殿の昼の御座で、その東の廂の間に帝の御倚子を東向きに立て、前に元服せらるる冠者の座と加冠の役の大臣の座が設けられた。　申の刻[illegible]迫ると[illegible]が参入された。　角髪に結つてゐられる顔つきから色艶の匂しさ、此の童形の可愛ゆさ

と考へてしまふのは、まことに惜しい事である。理髪の役を勤めたのは大蔵卿の蔵人であつた。侍従る内蔵をそぐ役には如何に心苦しく思ひ難いことであつたが、主上は此の子の新らしいお大人姿に、中の御息所が見たならばと思ひ出させねばす堪らない心苦しさとじつと我慢ねばならぬのであつた。さて冠の儀が済んで一旦御休息所にお退り遊ばされて、御衣を大人の装束に替へて、階を下りて、御神の拝舞をされたが、之れを見る人が皆涙を

感嘆させて

流した。帝は尚のことどうしても我儘を押し切れず、今までは時折かうれにあることもあつた男の業と、または思ひ出しては心を暗くなされたのであつた。

帝はそれまで、かう幼い時分に分かれては謂はゆる兄弟といふ様なものか、競争の身を失つて、同時に大人としては、ひどくただその様に寂しい思ひをしはせぬかと、御心配あそばしながら、それどころか、却くばかりのこの暮らしさをかへられた。

さて女御の役目をつとめた者たち居に、きみ女院

89)

生れの一人娘があつて、太宰大弐に[行]つてゐられたが、江前東宮から[所望]があつた。彼に躊躇する様子が見えたのは、娘の気に上らないとみる心があつたからであつた。大宰大弐は其の折にと、内意を伺ふと、大宰大輔婿のよい折で、もう元服もすんで大人になつたのに、まだ自分の世話をする者がないらしい、丁度よい機会その娘と深い仲に、[illegible]がよいぞと勧められたので、左大臣もその気になつになられた。

90）

さて御前を退出して、控所に納りかへると、人々
が御祝儀の御酒をいただいて居る所であつた
が、陸奥は諸王達が揃つたのまゝ座に着いて
居られた。大臣は将軍の事と体のゆか
なれぬか、知れしきりに顔を揃へて、とかくの返事
をしかねてあつた。そこへ御使が家臣を取り
へて、大臣に対し御前に進んで、さきの御召
しがあつたので、気らかつ。御物ぜらひとして
御陽はりの目録を、お側づきの命婦の手を経て
下し賜はつた。白の大袿に上着、下着、絹の御衣

91)

一摘うれは恒例の事である。此

豆を賜はつて、その席に賜はつた者は

結ばれる心も深きと

業の色しあせずは

いときなき初元結に長き世を契る心

を結びこめつや

今日の儀式で、あの稚い子

の初元結と結んでくれた。これから撫でて

此の内子様の長い一生の世渡とする決心

をも結びこめてくれたのである。た

大臣は後見を許したいといふ思召があつて、お諭しおかれたのである。ただ大臣は

結びつる心も深きもとゆひに濃き紫の色し褪せずは

深き心の程をとゞめて、元服と結びそして歌はれる。

後に初元服の紫の色があせやすくそのあいやしは、内親王の悲恨の語られることへ

それのみ[illegible]と、[illegible]満ち足りて幸福に、同様に、前の通念として[illegible]、事々の場合は節をまもりつゝ、細くなく藥の中に昔して現はさる源氏の多情の[illegible]を

暁方もあけぬめる。
上達部の簾を開けあけて長階から庭上に下りて拝謝の舞踏をする。左馬寮の御馬に蔵人所の衆を振舞て舞踏が行はれた。内階のさげは親王方や公卿達が列をなして貝節に長にてこれらの下賜品をいただかれた。この日階下の庭前に敷かれた折櫃入りの肴や料理が籠に盛つた菓物などは、太大節が仰せによつて倒進させたものであつた。また庭下に賜はつた折櫃の藩傀や絹帛の下賜品を入れた韓櫃などは道

唐いちおに

きり切れぬ縁で、その私は東京出た時の折江と一緒で、
今度の方が勝れて、(くらべ) 即ちて亡くなったで
あった。
僕自身はその後大臣の里親に下られた。
ひとつの低級の志願者は世間に類のない婿で、美
をつくしてもてなされた。ただ医家では婿
男が大屋まで幼くして亡くなるのを見て、婿
らくの家へと思われた。女男は、少し年まさり
で入らうしやるところへ、嫁夫が不信をいたして
亡くなるので、不幸な嫁しかも形がいと思ふ

れる字であつた。此の方法は前回の出信州
が[illegible]の只子[illegible]指つてまた、他の方が前
と同母の兄弟で入らうとするので、出家信子
い、新之弟子は[illegible]、どうちはつけて了ふ[illegible]
戯筆録はそうして居られるところへ、この後生の
男まで[illegible]になつたので、東京の紹文男
でつまらん天下の路を越行けるべき方法の
小戯筆は有るかなきかに歴されて気味であつた。
たち法は或人かの地の方があつて、時は教
多の力なき人達があつた。その中の字時は前

人の少将で、大層若々しく美しかった。右大臣は少将の父の左

大臣との仲は好くなかったが、此の多能の少将

と又逃がすことが出来ず、将来の鍾愛する第四の

姫君の婿に迎へて、右大臣が源氏を嫌はずにすますものには

中に有らずかしづかれたものは、其ことに好ましい

仲間がらであった。

源氏の君は主上が姫君お側を離さずに出仕

みはなされ（私られる）ので、落ちついては如何里方に入らつ

しゃることも出来なかった。さうして心の中で

は唯藤壺の内容と、天下無双の此方と思ひ

申上げて、あつしよかが方をうを無上意くて、見ち乱しいものである。似寄りの者おち世の中に全く、我が妻と優れてのらつやしつることではないか。

となつたおち医の女房は、いつも川端仕立に新へ迎へ惚まれた人とはみえるかどうも気に入らないと思はれて、純な心の一端に思ひつめては、心を悩ますれた。その中に大人になられると、今は寂かましのやうんな簾の内へも入れにはならなくなつたので、たまさか遊絵の山越ろうの折りに、隣や簾の音を聞いては親ーみて感じ、山幕の隣の

かに漏れて来るのを、傍ながら聞いては、せめてもの慰めにしつゝ、内裏に居ることをのみ頼もしく思はれるやうになつた。従つて主上にも后の御側に居られるのは、わづか二三日ぐらゐ訪ねられたりなどして、左大臣家では、まだ御幼少の女御の御機嫌をとるのにばかり骨折つて、一般の機嫌を損ねるものとはつとめられた。また御二人の御側近は探りぬきの若い女房達を傍けば、わざわざ内裏に入るやうな遊びをして、出来る限り紛らはしげ

分れた。

さて又内裏では、もと女東宮の住まれた御学問所（御座）を御使用の御殿にして、其の女房に仕へた女房達をば、お側を離れずのまゝ奉仕せしめられた。また御息所の御部であつた二條院を、御修理して内道場に宛てがわれて、此の御もまた主は修造せしめられた。其の御殿は本あらしてあるや山の様子などの面白い所であつたが、更に手をかへて池を広く深くして豊かに水を湛へるなど、多くの工人が出入して、修構

100,

づくめに作りあげたのだつた。
かくして母君の住まれた里御所が立派に新装を凝らしたが、それにつけても、かうした所に心に叶ふ様な人を据ゑて住みたいものだ、とばかり、そしてそれが出来ないのだ、あゝつまらない、情ないとばかり、嘆息をつゞけられた。
光ると云ふ名は、もと相人の高麗人が感歎の余りお附け申したのだと、言ひ伝へたとのことである。

桐壺をはり

昭和二十八年十一月二十一日起稿
三月十六日脱稿

大津海軍航空隊　隊歌

第三分隊　飛長　金尾